

信 陽(しんよう)

登録番号：第2290号

育成者：東城喜久 小林祐造 山西久夫

登録年月日：平成2年6月13日

木原 宏 柴 寿 今川昌平

登録者：長野県(長野市南長野字幅
下692-2)

来歴：「山形3号」と「甚四郎」の交
雑実生

特 性

■栽培特性

樹姿はやや開張性を示し、樹勢は強く、樹冠が大きい。枝梢は暗褐色でやや細く、節間長が長い。枝の発生は中程度で、花芽の着生は多い。育成地における開花期は4月上中旬で、「平和」、「新潟大実」、「信州大実」等と同時期である。花は一重で普通咲き、大きさは中位で、花色は淡桃色で、「山形3号」と比べて淡い。葉身の形は円状広卵形で、葉面の毛じは少なく、葉色は緑色を呈する。

花芽の着生は多いが、自家結実率がやや低いので、受粉樹を混植するとともに、訪花昆虫の積極的な導入・増殖に努め、結実確保を図る。訪花昆虫が不足している場合や低温が続く場合には、人工受粉を行う。受粉樹や花粉採取用として適する品種は、「平和」、「新潟大実」、「信月」、「信州大実」等である。結実量は中程度であるが、着果過多になると小果となり、果実品質が低下するので、摘果を行い適正着果量に仕上げる。

成熟日数は満開後74～81日(過去5年間平均)で、育成地で7月上旬に成熟する早生品種である。「山形3号」とほぼ同時期で、「平和」より約4～5日遅い。

果肉熟度に比べて、果皮の地色の抜けが早く橙色が濃いため、未熟果を収穫しやすい。また、過熟果は粉質化しやすいため、適正な熟度の把握が必要である。収穫適期は、果皮色だけでなく、酸度、食味、果肉硬度等から判断して決める。

■果実特性

果形は楕円形で、「平和」や「山形3号」に比べて縦長である。果頂部は凸、梗あ部の広さ・深さも中程度で、赤道部の縫合線はやや浅い。1果重は50g程度で、「平和」、「山形3号」とほぼ同じ大きさである。果皮の地色は、「山形3号」に似て明るい橙色で、陽光面はやや着色し、玉揃い、外観は優れている。裂果は、「平和」や欧州系品種に比べて少ないが、成熟期に降雨量が多いと梗あ部に発生する場合がある。

果肉色は橙黄色、肉質は中で、果汁は多く、渋味、苦味はない。糖度は10～13度で、主要品種に比べて1～2度高く、酸度はpHで3.2前後で、「平和」や「山形3号」に比べて少ない。このため、甘酸のバランスが良く、多汁であるため生食用品種として優れている。

核は楕円形で、果面の紋様は「山形3号」に比べてやや浅く滑らかである。核と果肉の粘離は離核で、核離れはすこぶる容易である。

果肉を加熱処理すると肉崩れしやすいため、シロップ漬等の加工適性には劣る。

■病虫害抵抗性

胴枯病、コスカシバ等の枝幹障害に対して強い。灰星病には中位の抵抗性であるが、通常の防除を実施していれば特に問題ない。

■地域適応性

樹体の耐寒性は強く、適応性範囲は広いと思われる。土層が深く、排水良好な肥沃地に適するが、ももに比べて耐干性が強いいため、比較的乾燥する場所でも栽培可能である。

気象条件として、開花期と成熟期に降雨が少ない地帯が適する。また、開花期が早いため、霜穴、霜道に注意して植栽をする。

(宮沢孝幸)